

氏名(本籍)	梁 智 英 (韓 国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博 甲 第 5209 号
学位授与年月日	平成 21 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	一九二〇年代の柳宗悦と朝鮮 - 朝鮮知識人による柳言説の転用と主体形成 -
主 査	筑波大学教授 博士(文学) 青 柳 悦 子
副 査	筑波大学准教授 加 藤 百 合
副 査	筑波大学准教授 博士(文学) 齋 藤 一
副 査	筑波大学講師 平 石 典 子
副 査	宇都宮大学教授 博士(文学) 丁 貴 連

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、「民芸」運動で知られる柳宗悦(1889 - 1961)が1920年代に展開した朝鮮をめぐる活動に焦点を当て、これをとくに植民地下朝鮮の時代的コンテクストとの関連から検証し直すことによって、柳の朝鮮関連の活動の歴史的意味を明らかにしようとするものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第一章 「民芸」の成立と朝鮮 - 「白樺」から「民芸」への転換 -

第二章 柳が描いた理想の朝鮮風景 - 「彼の朝鮮行」が語るもの -

第三章 柳の朝鮮芸術論と「文化政治」 - 「朝鮮民族美術館」設立計画をめぐるメディア言説を手がかりとして -

第四章 〈音楽会〉〈講演会〉と朝鮮のメディア - 〈言葉〉で理解し共有される音楽会 -

第五章 「朝鮮民族美術館」という〈場〉 - 白樺派的理想と朝鮮メディアの言説がせめぎ合う空間 -

結章

序章では、先行研究を概観しながら、現在ようやく日本での柳研究と朝鮮における柳研究を総合しうる時期が到来したことを述べるとともに、本論文の視点を明らかにする。すなわち、大正文化主義および白樺派文化運動との関連のなかに柳の朝鮮関連の活動を据えること、そして、柳の活動が朝鮮にとってもつ意義を当時の朝鮮側メディアの二つの流れ(朝鮮総督府寄りメディアと“民族”系列メディア)から捉えることである。

第一章では、柳と朝鮮芸術の関係を、柳の長い活動経歴のなかに位置づけ、いわば総括的な視座を提示する。白樺派としての活躍から中・後期の「民芸」運動の展開まで柳の美意識の変転をたどり、この転換を支えた重要な契機として、柳の朝鮮芸術の発見を意味づける。その作業のなかでとりわけ、柳による「朝鮮の美」の発見には二つの段階があったことを論証する。すなわち、『白樺』同人としての活動のなかで朝鮮芸術の価値に目覚めた第一の発見と、「民芸」運動を開始してのちに、新たに獲得した「用の美」の視座にし

たがって朝鮮の工芸を民衆芸術として改めて価値づけた「再発見」とである。

第二章では、朝鮮半島を旅行した柳が書いた「彼の朝鮮行」というテキストを分析する。とりわけ、自分自身を「彼」と記述する三人称の語りの形式に着目しながら、当時あまた存在した朝鮮旅行記とは異なる柳の視点や記述内容を検討する。柳の朝鮮へのまなざしが、白樺派特有の理想主義を、わけても個別的で特殊な美を普遍的な美に通じるものとする独特の「普遍」美学を、強固に引き継いだものであることを明らかにする。同時にこのテキストが、現実の自分の描写あるいは現実の旅行記ではなく、むしろ柳の理想とする朝鮮の風景や日・鮮の友愛を描いたものにすぎないという限界を指摘する。

第三章以降の大きなテーマとなるのは、柳が構想し、1924年に実現にまで至らせた「朝鮮民族美術館」である。それとともに、柳の活動は朝鮮側にとってどういう意味をもったのかを、朝鮮のメディアの反応を通じて明らかにする作業を展開する。

まず第三章では、柳が1919年から発表し始めた数々の朝鮮美術関連の文章や美術館の設立構想を、朝鮮のメディアがどのように取り上げたのかを詳細に検討する。その背景としてまず、1919年の三・一運動（朝鮮で起きた植民地支配への大規模な抵抗運動）以後に総督府がとった懐柔的「文化政策」と、それによって新たな新聞・雑誌の発行が許可され民族覚醒の機運が生じたことを押さえる。その上で、「情」「愛」を語る柳の言説が総督府側メディアでは日本への「同化政策」に沿うよう利用され、他方『東亜日報』等の民族系列メディアでは、柳の普遍美学が、日本の帝国支配を超えて朝鮮が直接に世界の普遍的な文化価値に与しうるという主張へと転用されたことを、綿密に検証する。

第四章では、「朝鮮民族美術館」を設立するための活動として、柳がおこなったさまざまな文化事業のなかでも、著名な声楽家であった妻の柳兼子の音楽会と柳自身の講演会に着目する。朝鮮において1924年までに22回も開催された兼子の音楽会の意義を明らかにするために、まず朝鮮半島の音楽事情を歴史的に検証して音楽が担った政治性を捉えた上で、1920年代の朝鮮において西洋音楽が果たした民族文化覚醒の役割を当時のメディアの言説などをもとに指摘する。さらに兼子の音楽会が、柳の講演会との関連においてたえず論評され、朝鮮知識人にとっていわば柳の知的メッセージを受容する場として機能していたことを明らかにする。

第五章ではまず、「朝鮮民族美術館」を、1917年に武者小路実篤が構想宣言した「白樺派美術館」（実現しないまま1923年に断念）の理念と照らし合わせ、白樺派の理想が、柳の「朝鮮民族美術館」として結実したことを検証する。一方、柳がこの美術館開館までの準備として朝鮮でおこなった「西欧名画複製展覧会」（1921年）や「李朝陶磁器展覧会」（1922年）が朝鮮文化界にもたらした影響、また、20年代初頭に朝鮮人自身の活動としておこなわれた書画展や美術展のもつ文化的・社会的・政治的意義を、いずれも朝鮮のメディアによる報道を検証することによって明らかにする。その上で柳の設立した「朝鮮民族美術館」の功績と、それが日本人による「収蔵」すなわち一種の文化収奪行為であることを逃れられないという限界とをあらためて指摘する。

結章では、論文全体を振り返って、本論文の研究成果を確認する。また巻末に「朝鮮メディアにおける柳宗悦関連記事一覧（1920年～1921年）」および「柳宗悦年表」を付す。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の第一の特徴は、柳宗悦の朝鮮美術をめぐる活動を、朝鮮のメディアを通じて検証したという点にある。とりわけ、総督府側の新聞（とくに『毎日申報』紙）と、三・一運動後に許可された民族系列側の新聞・雑誌（とくに『東亜日報』紙）の記事を詳細に調査して柳の活動を再考する論拠としたことは、画期的な業績である。韓国人として朝鮮語に通じていることを最大限に生かした研究活動であり、その成果は日本

の柳研究に大きく貢献するものと評価できる。とりわけ柳に対する朝鮮での反応を単純に一元化することなく、対立する二つの政治的・社会的文脈の拮抗する場として捉えたことにより、重層的でダイナミックな歴史的社会的検証を達成している。

本論文の第二の特徴は、複雑な影響力をもった柳の朝鮮関連の活動を、白樺派から民芸運動へという柳の活動展開全体の流れのなかに位置づけた点である。個別的な美が普遍を構成するという、ほとんど逆説的な白樺派の美学的理想論に筆者は着目し、それが柳の朝鮮美術へのまなざしを貫いていることを論証した。また朝鮮知識人による文化的民族運動もまさしくこの白樺派的な理想論を受け継いだものであること、さらに柳の言説の「転用」も実はこれに基づいている側面があることを照らし出した。現在の柳の評価の中心に据えられる「民芸」運動と、朝鮮美術関連の活動の根源的な交差を、理念や活動の仔細な検討を通じて明らかにした点も、重要な成果として指摘できる。

以上のように、画期的な視点と信頼性の高い作業に基づく高度な学問的業績として評価されるべき本論文にも、望まれる点がないわけではない。とくに第二章のテキスト分析はやや踏み込みが浅いままに終わったきらいがある。また、柳の活動の積極的意義については十分に明らかにしているものの、総じて彼の限界についてはより注意を傾けて論じる余地があると思われる。しかしこうした点は、本研究の達成後に改めて着手されればよい種類のものであり、本論文の成果をいささかも損なうものではない。

よっても著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。